解　説

「品質工学」誌の価値を高めるために（その2）

For Enhancing Value of Journal of Robust Quality Engineering Society (2)

出版部会編集委員会

参加者：矢野耕也（日本大学），江末良太（IHI），窪田葉子（日本水環境学会），坂本雅基（花王），澤田位（NMS研究会），高橋和仁（神奈川県立産業技術総合研究所），細井光夫（小松製作所），見原文雄（日本能率協会コンサルティング），吉原均（キヤノン）
編集委員外参加：上杉一夫（上杉技研）

専門分野との交流

窪田　面白いことを書いてくれそうな人に積極的にコンタクトをとるなど，情報収集も必要になる。

高橋　品質工学の研究には専門技術との協力が必要である。溶接と品質工学，塑性加工と品質工学など，たくさんネタがあるはず。専門技術サイドと品質工学サイドの交流を積極的に図り記事に反映させることも大切であろう。

澤田　先のNMSの公開研究会での提言もそうした点にあった。品質工学の用語が当該の研究者の用語と違う問題が往々にして双方のコミュニケーションを妨げることがある。先ほど沢田さんに原稿依頼した際に話したのは，品質工学プロパーと専門技術との対話が絶対に必要だということだった。

高橋　田口玄一が一人でやってきたことである。また，他分野との協調は他の学会でもやっている。それらのことを学会で掘り下げていく必要がある。そうすることが品質工学の発展や普及に必要だと思う。外部の人に対する品質工学のハードルを良い意味で低くする。

坂本　いずれの場合でも，いきなり解説記事にしようとすると敷居が高くなるので，まずは「QEスクエア」への投稿を促したい。

見原　3ページのつもりが，長くなることもある。これから先のことを考えると，情報発信の場は，インターネットが主になるべき。ネット上なら偶然の出会いも期待できる。

矢野　他の学会では学会誌と同時にネット上にもコンテンツを出しているのだろうか。そもそも紙ベースの学会誌をなくしたところもあるようだ。

高橋　ネット配信する場合でも少し遅らせて出すものもある。

吉原　J-STAGEで論文は1年遅れで公開されるが，論説や解説，掲示板等の論文以外の記事を公開する仕組みがない。

見原　われわれが公開したいものを選んで出したら良いのではないか。

窪田　メールマガジンは残らないことがデメリットである。

見原　学会員以外への訴求を考えるなら，検索にかかることが大事だ。ただし，学会員の利益を守るための歯止めが必要になる。

吉原　J-STAGEを始めて2年になるが，結果として学会員はさほど減っていない。もっと減ってもおかしくないと思ったが。

坂本　発信することに価値を置く人がいるということだろう。

澤田　ここのところ定年退職等で約300人が退会し新入会員が200人ほどあり，結果として全体では毎年100人ほどの減員が続いている。全体としては減っているが，増えることを期待して新入会員を意識